

徐霞客遊記の基礎的研究(三)

—事類篇・洞(その1)—

薄井俊二 埼玉大学教育学部言語文化専修国語分野

キーワード：徐霞客遊記、洞、伝統中国科学思想

1. はじめに

「徐霞客遊記」(以下「遊記」)⁽¹⁾を高く評価する点のひとつが、洞穴⁽²⁾にある。中国で出版されている専門書や概説書の多くが、遊記の洞穴記述を取り上げ⁽³⁾、エジンバラ大学のジュリアン・ウォードの『徐霞客：遊記』⁽⁴⁾においても、その一節を“Cave”に割いている。世界の洞窟学を概論したエリック・ジッリの『洞窟探検入門』⁽⁵⁾では「表1 洞窟探検の歴史」において、「洞窟学のはしり」として「1642年 中国明代の地理学者徐霞客が中国の250の洞窟を記述」としており、洞穴に関する記述として、徐霞客遊記が世界的にも古いものであることを確認している。

しかし、例えば徐霞客が記述した洞穴の「数」といった基礎的な事項についても、先のジッリは「250」というが、その根拠は示されていない。また江陰馬鎮の徐霞客故居での掲示物では、遊記記載の洞穴の数を「357」、霞客が自ら探索した数については「270以上」とし、桂林においては「60以上」の洞穴を考察したとする。しかし、掲示物には、これらの数値が何に基づいているのかについては記述がない。

そこで、徐霞客遊記における「洞穴」について検討し評価するためには、まず、どれだけの洞穴がどこに記されているかといった基礎的作業を、改めて行う必要がある。本稿はその第一歩として、「遊記」巻一、並びに巻二「浙遊日記」における洞穴記述の概観を行う。

2. 「徐霞客遊記の洞穴」研究概略

「遊記」の検討に先立ち、徐霞客と洞穴についての、研究史を概観しておく。

2-1. 大陸中国

(a) 主な研究論文

まず大陸中国における研究史を概観しておく。

徐霞客遊記の研究においては、2004年の、呂錫生主編『徐霞客研究古今集成』(中国書籍出版社、以下「集成」)の刊行がひとつの節目となる。「集成」は、A4版で1000頁を越える大著で、徐霞客遊記に関する文献や研究史の回顧、さらには重要な論文217点の原文を収録する。これには、カルスト地形と洞窟について、10点の論文が収録されている。以下、この「集成」の研究成果を補う形で記述していく。

第一に取り上げるべきは、侯仁之「徐霞客——石灰岩地貌考察的先駆」(集成P631～634)で

ある。これは、中国徐霞客研究会編「徐霞客研究」第1輯（1997）収録のものだが、「徐霞客研究」の編者によれば、もともとは1961年開催の「第一次全国カルスト研究会」において発表された原稿で、それが『二十世紀中国学術散文精品』（1996）に収録されたものを転載したという。徐霞客のカルスト地形に関する記事に言及した、おそらく最初のものである。この中で、侯仁之は徐霞客の観察と描写の客観性を高く評価し、「徐霞客が考察した洞穴は、100以上」にのぼるとする。また、桂林七星巖について、1953年に中国科学院地理研究所の陳述彭氏が行った実地調査の結果が、徐霞客の描写と一致していたことを紹介している。

第二に、南京師範大学地理系主編『徐霞客研究文集—紀念徐霞客誕辰四百周年』（江蘇教育出版社、1986年、以下「江蘇文集」）所収の論文がある。「江蘇文集」には25篇の論文が収録されているが、そのうち次の4点がカルストと洞穴に関わるものである。

任美鏗「徐霞客对世界岩溶学的貢獻」（集成P641～643）は、「集成」の編者注によれば、「地理学報」（39-3、1984）所載の初版を任本人が修訂したものだという。ここでは、徐霞客の貢獻として、岩溶生成の仕組み、熱帯岩溶、洞穴学の三分野をあげる。そして「100以上の洞穴に実際に入って」調査し、その大小や深さ広さ、洞内各部分の関係などについて客観的に探索している点において、現在の洞穴学の先駆的存在であったとする。

朱德浩・朱学穩「徐霞客对岩溶学和洞穴学的貢獻及其在世界岩溶科学史中的地位」（集成P649～656）では、徐霞客の洞穴学上の特筆すべき特徴として次の4点をあげる。考察の範囲対象が広大であること、極めて客観的な視点で観察していること、「300以上の洞穴を自身で探査していること」、宗教神学的自然観から脱していること。

なおこの論文とほぼ同趣旨のものが、中国地理学会刊行『徐霞客誕辰400周年文集』（1987）に「世界岩溶地貌和洞穴考察研究的先驅——徐霞客」と題して、朱德浩・李慧芳の連名で掲載されている（集成P665～670）。ここでは徐霞客の特徴として、先の4点に加え、カルスト地形に関する基本類型を提示していること、水文地質について記録していること、記述内容を不断に深化させていることを挙げている。また、徐霞客が探査した洞穴については「400件前後（ほとんどが岩溶洞穴）」としており、前稿よりも、「100件あまり」増加させている⁶⁾。

「江蘇文集」にもどれば、張英駿「徐霞客遊記中对洞穴形態的觀察与記述的科学意義」（集成未収）では、徐霞客の洞穴記述の特性を5点あげる。すなわち、重要と思われる洞穴（例えば湖南の麻葉洞）については詳細な考察と記録をしていること、洞穴現象について規則性を認めていること、いくらかの洞穴現象について科学的解釈を行っていること、洞穴の利用について重視していること、洞穴の形態について重視していること、以上の5点である。そして洞穴の様々な形態について、遊記の本文も引用しながら解説している。しかし、徐霞客が探索した洞穴の数については言及がない。

「江蘇文集」からの4点めは、鞠繼武「徐霞客在地貌学上的貢獻」（集成未収）で、洞穴に関しては、「地下岩溶地貌」の項目で、「溶洞の分類」「二次生成物」において、遊記の本文も引用しながら簡単に解説している。この論文でも洞穴の数については言及がない。

第三には、朱栄等編『紀念徐霞客論文集』（広西人民出版社、1987）所収の、朱德浩「徐霞客对洞穴次生化学沈積物的考察研究」（集成P671～674）があり、ここでは徐霞客が記述した二次生成物について、6種類の類型化を試みている。

第四に、唐錫仁・楊文衡『徐霞客及其遊記研究』（中国社会科学出版社、1987年、以下「唐・楊」）がある。これは徐霞客に関する研究著作としては初期のものに属する。その中の「第三章在地理

科学上の貢献」「第一節地貌」において、遊記記載の洞穴の数をあげている。ここでは、遊記に記されている洞穴を、溶洞と非溶洞合わせて357とし、そのうち徐が自ら入ったものを306とする。全357洞中、石灰岩溶洞を288（福建2、浙江14、江西9、湖南25、広西194、貴州13、雲南31）とし、他の69が、石灰岩以外の溶洞と非溶洞だとしている。ここで洞穴の総数を357とするのは、徐霞客故居の掲示物の数値と符合している。おそらくこの項目は、楊文衡の担当と思われ、楊文衡「徐霞客对我国古代岩溶洞穴研究的貢獻」（集成P635～640、原「中国岩溶」（1983-2））所収の内容は、この部分と重なっている。

第五に、『徐霞客研究』（1987、南京大学出版社）所収の、王家駿「洞穴学研究的先駆—徐霞客」（集成未収）がある。ここでは徐霞客の洞穴学研究の内容として、「①洞穴測量」「②洞穴描述（二次生成物など）」「③洞穴構造」「④洞穴成因」「⑤洞穴開発・保護」の五点をあげている。

第六に、『千古奇人徐霞客—徐霞客逝世350周年国際紀念活動文集』（1991）所収の、褚紹唐「徐霞客在岩溶地貌上的貢獻」、楊載田・熊紹華「徐霞客对湘南科学地理考察的貢獻」、卞鴻翔「徐霞客对湘南岩溶地貌的考察研究」（いずれも集成未収）がある。

褚紹唐は、呉応寿とともに、徐霞客遊記テキストの決定版ともいえる、整理本上海古籍出版社本を刊行（1980）した人で、本論文は、本文校訂という読み込みを経た上で発表された成果といえる。この論文で褚紹唐は、徐霞客が考察した岩洞について、初歩の統計としたうえで、224箇所とする。省ごとのうちわけは、浙江10（金華8、杭州飛來峯、臨安洞山）、江西5（梅田4、石城洞）、湖南約26、広西159（桂東北2、桂林63、陽朔8、柳州5、融県12、勾漏13、郁江沿岸4、太平府及其付近6、向武州8、三里城19、慶遠州16、桂西北4）、貴州約9、雲南約14、福建1（将楽玉華）である。⁽⁷⁾

楊載田他の論文は、湘南地域（湖南省南部）という限定の上で、「楚遊日記」記載の溶洞を40点以上としている。

卞鴻翔は、湘南地域（湖南南部）における徐霞客の洞窟観察研究を述べる。茶陵の麻葉洞や九嶷山の斜岩（紫霞洞）に対する徐霞客の観察は、周到で丁寧なものであり、続く広西における百を超える洞窟探索の先駆的仕事として重要である。

第七は、鄭祖安・蔣明宏主編『徐霞客与山水文化』（上海文化出版社、1994）。この論文集は、多くの研究者が様々な視点から徐霞客をとりあげたものだが、「第四篇遊名山勝洞」において、7つの洞穴遊が紹介されている他、「第七篇探天地奧秘」において、洞穴に関する論文が2件ある。

「遊勝洞」で取り上げられているのは、遊記において重要なものであり、かつ現在においても有名なものであろう。以下紹介すれば、「1. 遊金華八洞」（浙江金華市、崇禎九年十月十日訪問、浙游日記所収）、「2. 遊将楽玉華洞」（福建三明市将楽、崇禎元年三月二十日訪問、閩游日記前所収）、「3. 遊茶陵麻葉洞」（湖南茶陵県、崇禎十年正月十七日訪問、楚游日記所収）、「4. 遊桂林七星巖」（広西桂林、崇禎十年五月二日及び六月二日訪問、粵西游日記一所収）、「5. 遊陽朔龍洞」（広西陽朔、崇禎十年五月二十四日訪問、粵西游日記一所収）、「6. 遊融水真仙巖」（広西融県、崇禎十年六月二十六日訪問、粵西游日記二所収）、「7. 遊北流勾漏洞」（広西北流県、崇禎十年七月八月一日訪問、粵西游日記二所収）である。このうち、3と6は、現在は観光地として整備されていないようである⁽⁸⁾。

掲載論文は、洪建水「岩溶地貌考察的先駆」と楊文衡「偉大的洞窟探索者」（いずれも集成未収）である。洪建水論文は、遊記が各種の岩溶地貌の名称を定めていることを評価している。また楊文衡論文は、第四としてあげた楊論文の再録である。

第八に、『紀念徐霞客誕辰410周年文集』（1997）所収の、潘鳳英「論徐霞客研究我国喀斯特地貌的主要成就」（集成未収）がある。この中の「地下カルスト地貌」の項では、徐霞客遊記で考察記述された岩洞は、「数百」と概数をあげ、その中で徐が実地考察し描述した石灰岩溶洞は288あるとする。また遊記中での溶洞の分類として「乾洞（陸洞）と水洞」「明洞と陰洞」「雪洞と風洞」などがあるとする。

この潘鳳英は、朱鈞侃・倪紹祥主編『徐学概論—徐霞客及其遊記研究』（江蘇教育出版社、1999）において、「第十章《徐霞客遊記》与地貌学研究」を担当している。その「第二節《徐霞客遊記》与喀斯特地貌」「二.《徐霞客遊記》与洞穴研究」において、前稿の分類などを展開させつつ、初歩統計のものとした上で洞穴の種類ごとの数字をあげている。すなわち、岩漿岩石洞が16（天台山、雁蕩山、華山…）、紅層洞が14（白岳山、武夷山、龍虎山…）、變質岩石洞が3（恒山、五台山…）、石灰岩溶洞が473（未進洞考察的溶洞97を含む）としている。そして、最も記述の量質ともに豊かなのが、石灰岩溶洞、すなわち鍾乳洞であり、376を数えるという⁽⁹⁾。

潘鳳英のものとして、集成は、「徐霞客在考察岩溶地貌的貢獻」（P628～630）をあげるが、ここでは出典を明示しない。内容は、『徐学概論』所収のものダイジェスト版だが、洞穴の種類具体例としてあげているものに若干の違いがある。すなわち、岩漿岩石洞に「衡山」を加え、紅層洞に（紅色砂礫頁岩層）との注をつけた上で「龜峯」を加えている。

上記の他の、集成所収の論文を確認しておくと、繆鐘靈「論徐霞客对西南喀斯特研究的貢獻」（集成P644～648）は、「地理研究」（5-4、1986）所収で、徐霞客の西南カルストに対する理解について論じるが、洞穴については言及がない。曾昭璇「徐霞客对我国喀斯特地形研究的貢獻」（集成P657～664）は、「自然雜誌」（10-1、1987）所収であるが、他の研究と比べて特段の特色は見られない。楊作民「浅析徐霞客岩溶和流水地貌的卓越貢獻」（集成P675～678）は、中国地理学会刊行『徐霞客誕辰400周年文集』（1987）所収で、岩溶地貌と流水地貌との両方を論じる。その中で、徐霞客が考察した洞穴の数を「220あまり」としている。

以上、集成所収の論文を中心に、中国における徐霞客の洞穴の記述について概観した。集成以降の論文等も検索したが、先行研究を踏まえた概論的な記述は見られたが、洞穴に関する専門的な新たな研究は確認できなかった。よって、上記の期間、おおむね1960年代から1990年代が「徐霞客と洞穴」に関する研究のピークであり、それ以後は新たな視点からの研究はなされていない。

(b) 洞穴の数

徐霞客が探査し記述した洞穴の数について見れば、先行研究では以下の通りであった。

研究初期の侯仁之と任美鏗は「100以上」と概数をあげ、朱徳浩らは1986年には「300以上」、1987年には「400件前後」とやはり概数をあげるにとどまっていた。

きちんと数を数え始めたのは、1987年の唐・楊からで、ここでは遊記に記述されている洞穴全体を357とし、そのうち徐が自ら入洞したものを306とする。洞穴の種類としては、石灰岩溶洞を288、石灰岩洞以外の溶洞と非溶洞が69だとした。

一方、遊記の基本的テキストを作った褚紹唐は、1991年の論文で、記述されている洞穴を224とする。洞穴の数全体でも、省別の数でも、楊文衡とはかなり隔たりがある。

また、潘鳳英は、1997年の論文では、徐霞客遊記で考察記述された岩洞は「数百」と概数をあげ、その中で徐が実地考察し描述した石灰岩溶洞は288だったとする。この数値は、楊文衡のそれと一致する。しかしのちの1999年論文では、洞穴を種類に分けたうえで、石灰岩溶洞が473あり、

そのうち徐霞客が実際に入洞して考察したものは376だという。この数値は、前稿の数値から大幅に増加している。

また楊載田は、湘南地域（湖南省南部）という限定の上で、「楚遊日記」記載の溶洞を40点以上としている。

以上のように、徐霞客が記述したり入洞した洞穴の数については、研究者によってかなりの違いがある。その原因のひとつは、洞穴のどの範囲を「1」と数えるかが人によって異なっているからである。二つの洞穴が隣接して存在している場合、それらを「1」とするのか「2」とするのかの違いなどである。

結局、各研究者があげる数字だけを見ていても確かなことは言えない。遊記の記述に即して数え直す必要がある。

(c) 洞穴の分類

大陸中国では、徐霞客を科学者として評価しようとする視点が強く、「偉大な先駆者」「傑出した科学家」という枕詞がしばしばつけられる。徐霞客の洞穴記述についても、西洋近代科学の成果に引きつけて理解・評価する傾向が強い。例えば、唐・楊においては、遊記の記事を分析するにあたって、先ず「岩溶地貌（カルスト地形）」という近代地理学上の概念を提示する。さらに「地表岩溶」「地下岩溶」にわけ、後者をさらに「溶洞（鍾乳洞）」「洞穴堆積（二次生成物）」などと分類し、それぞれの概念に即して遊記の記事を紹介していく。また潘鳳英も「岩漿岩石洞」「紅層洞」「石灰岩溶洞」といった現代地質学上の成果に基づく洞穴の分類をしてゆく。

しかし、徐霞客の洞穴観察・理解について、生成要因や地質学といった、西洋近代科学的な分析の視点で評価することは、妥当なのだろうか⁽¹⁰⁾。

徐霞客がかなりな客観的視点でもって、洞穴を観察し記録したことは間違いではない。ある種の「合理性」を追究する姿勢を持っていたことも確かである。しかし、徐霞客は、決して西洋近代科学思想の流れの上にあったわけではなく、あくまで、伝統的中国文化の「自然観」「自然科学思想」の流れの上にあった。そうであれば、彼の「科学性」「合理性」にしても、西洋科学思想の視点からではなく、中国の「科学思想」の視点から評価することが必要であり、妥当ではなかろうか。

例えば、後述するウオードも指摘するように⁽¹¹⁾、徐霞客は、山岳や洞穴を記述するにあたって、「脈」や「砂」といった風水説に基づく用語を多く用いている。また晩年の小論文である「湖江紀源」においては、中国を西から東に貫く三大龍脈説が説かれている。これらのことをしっかりと踏まえる必要がある。すなわち、徐霞客の地脈の考え方は、風水説と通じるものであり、洞穴についても、「気の脈」であると理解していた、と捉えるべきではないか。

洞穴の分類についても、西洋近代地理学に基づく分類によるのは妥当では無かろう。深く長い鍾乳洞も、浅い割れ目のような丹霞地貌の洞穴も、「気」が流れた痕跡であるという点では、同じ「洞」と見ていた、と考えるべきであろう。

広西を中心として鍾乳洞の記述において、質量ともに徐霞客が大きな成果をあげていることは間違いがないが、「気脈」「地脈」の一部としての「洞穴」という、徐霞客自身の考え方からすれば、福建武夷山の丹霞地貌の洞穴も、浙江雁蕩山の火成岩の洞穴も同じように扱われなければならないと考える。

以下、本稿以降で洞穴を具体的に数え、分析している際には、西洋近代科学の成果にとらわれ

ることなく、記述の対象となっている洞穴全てを取り上げることとする。

2-2. 欧米

徐霞客及びその遊記に関しては、ジョセフ・ニーダムとジュリアン・ウォードを取り上げる。

(a) ジョセフ・ニーダム『中国の科学と文明』

ニーダムの『中国の科学と文明』⁽¹²⁾では、巻1「序編」の「第6章 歴史概説」の「(j) 明王朝＝清（満州）王朝」に徐霞客の記述がある。明代は地理学が盛んであったとし、徐霞客が、「当時實際上未知であった中国の広大な西部と南西部の地域の踏査に生涯を費やした」とする。しかし、言及はこれだけで、巻6「地の科学」では、「第23章 地質学〔および関連科学〕」の「(b) 一般地質学」に、「(3) 洞穴、地下水、流砂」の項があるが、そこでは徐霞客への言及は見られない。

(b) ジュリアン・ウォード『徐霞客：遊記』

本書⁽¹³⁾は、徐霞客を取り上げた専著としては、欧米では初めてのものではないか。

本文は全6章からなり、最終章である第6章が徐霞客の自然観を検討する。その題名は、“Mountains and Caves”といい、ウォードが徐霞客の自然観について、洞穴を重視していることがわかる。

第6章は11の節からなり、3番目の“Fengshui and Dynamism of the Landscape”に続く4番目に“Caves”の節が置かれている。

先ず“Fengshui……”の節を見る。ここでは、中国絵画では、山岳を「勢」があるものと見、山脈全体をひとつの実体として捉えていることを指摘した上で、徐霞客の風景を見る方法もこれと同じであるとする。そして連続は「脈」であり、そこに「気の流れ」を見ると言う点において、徐霞客の記述は風水説と通じているものだとする。徐霞客の「溯江紀源」にまとめられているマクロな「龍脈」と、彼の「遊記」に散見されるミクロ（ローカル）な「脈」は同種のものであり、風水説のそれらと同様であるとする。

徐霞客が同時代の風水説・風水師をどう評価していたかについては、改めて検討する必要があるが、少なくとも同じ用語を用い、大地を生あるもの、脈が流れているものと捉えていた点については、両者は共通する。徐霞客の客観性や自然科学的傾向を否定することなく、風水説を含む「伝統中国における地理的把握の仕方」の流れの中に、徐霞客を位置づけて評価しようとするウォードの姿勢は重要であろう。

“Caves”の節では、「遊記」全体を通して洞穴が取り上げられていることの指摘に続けて、伝統中国の洞穴理解が説明される。すなわち、「洞天」などの、道教における洞穴重視の観念を押さえる。つまり伝統中国において、洞穴は神聖性を帯びたり、畏怖の対象となっていたことを確認する。その上で、徐霞客が洞穴をどういうものとして捉え、観察し、考察したかを検討している。ウォードによれば、それは、伝聞ではなく実地調査を行う、科学的とも言う「客観的観察・考察」という側面と、美しさやこちよさを感じとる「審美の対象」としての側面の両方があったという。後者に関しては、「遊記」は美しい語彙をちりばめた文章で書かれており、この方面についても徐霞客の興味関心が決して低くは無かったと指摘する。また庶民その他が陥っていた、洞穴についての「迷信」についても、徐霞客は、はげしくそれらを否定するのではなく、場合によっては楽しみもしたという。この点に関連するのは、徐霞客が泉の精霊に関する神秘体験を告白していること

を指摘している箇所であろう⁽¹⁴⁾。

徐霞客が取り上げている具体的な洞穴の数などについては、ウォードは大陸中国の唐・楊の研究成果などを踏まえている。しかし、徐霞客の洞穴理解を、近代科学の成果から照射するのではなく、伝統中国の文化の流れの中で、捉えようとする点は、先の“Fenshi……”と同様、首肯できるものである。

“Caves”の節以外では、徐霞客が長期に滞在し、質・量ともに豊かな内容の記録を残した「鶏足山」について、ウォードは一節を割いて“The Fenshui of Mouny Chickenfoot”を書いている。舞台が仏教寺院であるから当然ではあるかもしれないが、徐霞客は、風水地理的な記述の中に、仏教的要素を加えている、とウォードはいう。

以上、稿者の英文読解力の低さにより、誤読しているところも多々あるかと思うが、徐霞客の洞穴を含む自然理解についての、ウォードの説を紹介した。徐霞客の、大地の有り様や洞穴の理解の仕方を、近代科学の視点から評するのではなく、宗教や非科学的要素も含む、伝統中国の文化の流れの中で捉えようとするウォードの立場は成果が上がっているといえよう。

しかし、風水説における洞穴と、徐霞客が捉える洞穴観とがどうつながるのか、あるいはつながらないか、と言う点については、必ずしも明確になっているとは言えない。この点は、風水説を含む伝統中国の地理把握の仕方を追究・整理した上で、改めて徐霞客の洞穴記述を検討することで、明らかになるのではないかと考える。今後の課題としたい。

3. 徐霞客遊記の洞穴記述（その1）：巻1「名山遊記」、巻2「浙遊日記」

3-1. 名山遊記

遊記の巻1は、1607～33年の、17篇（対象重複あり）の山川遊行を記す。中国の名山探訪を中心とする、短編の文章の集成である。以下、1篇ずつ検討する。

①遊天台山日記 浙江1613年3月晦～4月8日

- ・4月3日、天台山華頂峯上の「黄経洞」。洞穴はふさがれており、観察できず。
- ・4月5日、天台山西南部の明岩の洞穴。深さ数丈、数百人が入れる洞。たて穴ではないか。若干の観察記録。
- ・4月6日、明岩に隣接する寒岩の、岸壁に穿たれた洞群を観察。その中に、広さ八十歩、深さ百歩あまりの洞。横穴か。若干の観察記録。

②遊雁蕩山日記 浙江1613年4月11日～15日

- ・雁蕩山は火成岩の岩山で、石灰岩質の鍾乳洞などは形成されない。崩落や風化などによる亀裂が洞穴を形成する。
- ・4月11日、東外谷の石梁洞。山の中腹に口を開ける。洞門の向きを含む、簡略な観察記録。
- ・同日、霊峯地区の霊峯洞。今の観音洞。縦に裂けた隙間が岩山の半ばまで続く。行き止まりがドーム状で、羅漢が立ち並ぶ。たて穴を登り、形状などを描写。
- ・4月12日、隣接の碧霄洞。探したが見つからず。
- ・同日、隣接の龍鼻の穴。霊峯洞に似て、やや小さい。中に入って登り、形状を描写詳述。これは現在の象鼻洞ではないか？

・同日、隣接の天窗洞。縦に裂けた隙間が二本あり、上端でつながる。中に入って登り、形状を描写。

・4月13日、道松洞。近くを通過するのみ。

③遊白岳山日記 安徽1616年正月26日～2月1日

・洞穴記述なし。

④遊黄山日記 安徽1616年2月2日～11日

・洞穴記述なし。

⑤遊武彝山日記 福建1616年2月21日～23日

・武彝（夷）山は、丹霞地貌。横の断層が浸食によって穿たれた浅い横穴洞穴群を形成。崩落によるドーム型の凹状洞もある。

・2月21日、九曲溪沿いの岸壁にある、横穴を、溪流上の小舟から見上げて観察し描写。船棺遺跡など。

・同日～22日、茶洞や伏羲洞など。崩落による小さな凹穴を、近場で観察し描写。

・2月23日、水廉洞。大規模崩落によるドーム状の凹穴を、観察して描写。

⑥遊廬山日記 江西1618年8月18日～22日

・審美の対象としての山水、その一環としての洞という描写が中心。「地脈」の視点はない。

・8月19日、仏手巖。錦繡谷に望む崖の上。崩落による浅いドーム。深さ五六丈など、簡略な描写。

・8月21日、東部の五老峯の洞。岩のひび割れが、門状をなす。簡略な描写。

・8月22日、南部の白鹿洞。「洞」と称するが、閉じた洞ではなく、四方を岩山で囲まれた場所。簡略な描写。

⑦遊黄山日記後 安徽1618年9月3日～6日

・9月5日、蓮華洞。簡略な描写。「坑」とも表現。浅い縦穴か。石筍あり。

・9月6日、仙灯洞。簡略な描写。洞口の方角を記す。

⑧遊九鯉湖日記 福建1620年5月23日、6月7日～11日

・6月8日、古梅洞。洞穴ではなく、門状。

・6月11日、石竹山の石洞。これも洞穴ではなく、門状。

⑨遊嵩山日記 河南1623年2月19日～25日

・嵩山は、太室少室とも呼ばれ、洞穴が多くあることがその命名であると言われるが、「遊記」においては洞穴の記事はそれほど多くない⁽¹⁵⁾。

・2月21日、太室山に登り、山下に洞穴が多くあるという。簡略な描写のみ。

・同日、無極洞（老君洞）を通り過ぎる。ここは修行の場としての浅い「窟」。

・2月23日、少室山に登る。山中に「坑（たてあな）」があるとの記述。

・2月24日、少室山麓の初祖洞。達磨大師面壁の、浅い「窟」。洞門の向かう方向の情報。

- ・ 2月25日、洛陽南の龍門の石窟。仏教遺跡。

⑩遊太華山日記 陝西1623年2月晦～3月10日

- ・ 3月1日、華山山頂の迎陽洞。玉女祠の旁らにある、住居並びに修行場としての人工洞。名称程度。
- ・ 3月2日、下山途中、毛女洞があるとの情報を得るも訪問せず。

⑪遊太和三山日記 湖北（広湖）1623年3月11日～15日

- ・ 3月15日、山頂少し手前の南天門付近に雷公洞。名称程度。
- ・ 最後に、嵩・華・太和三山の比較と、地形の総括をする。

⑫閩遊日記前 福建1628年3月12日～4月5日

- ・ 3月18日、玉華洞へ向かう。
- ・ 3月20日、鍾乳洞である玉華洞へ入洞。本格的な入洞観察であり、詳細な記録あり。
先ず入洞にあたっての照明器具などの説明。
内部の景観について、既に行われている「見立て」を紹介。石筍・鍾乳石・石柱など。
特に、洞奥の微かに光が差しているところ（五更天：夜明け前の空）を詳述し、浙江宜興の張公洞と比較検討。
「奇」と「美」が評価の観点。
詳細な洞穴観察考察としては、最初のもの。

⑬閩遊日記後 福建1630年7月30日～8月18日

- ・ 8月2日、福建省北端の浮蓋山の龍洞（石龍洞）に入洞。本格的な入洞観察であり、詳細な記録あり。
龍洞は鍾乳洞ではなく、岩にできたひび割れ。奥深くは暗く、灯火が必要。
体をねじ込むような細かい穴や、たちふさがる岩をよじ登って進む。
導者（僧侶）に導かれる。
出洞時は生まれ変わったかのような喜び。
- ・ 同日、もうひとつ別の洞。通過洞か？ 乾燥。
- ・ 8月14日、福建中部の永安付近、環玉洞。門状？

⑭遊天台山日記後 浙江1632年3月14日～18日

- ・ 3月17日～18日、高明寺付近の円通洞。巖に丸い穴が空いているもの。洞穴ではない。
- ・ 4月17日、寒巖付近の龍鬚洞。先の訪問では未見？ 簡略な記事。
雁蕩山の石梁洞、雁湖宝冠峯芭蕉洞に似ていると。
- ・ 同日、明巖付近の洞。洞があるとのみ。
- ・ 最後に、天台山水系をまとめて記述。

⑮遊雁蕩山日記後 浙江1632年4月29日～5月8日

- ・ 4月29日、石梁洞は名称のみ。

- ・同日、靈峯洞（観音洞）は、前記と同じ程度の簡略な描写。
- ・同日、風洞。簡略な描写。
- ・4月30日、浄名谷の水簾洞と維摩石室。名勝として名をあげるが描写なし。
- ・同日、響巖付近の、龍王洞・三臺洞。「出洞」とあり、入洞したのだろうが、岩洞で、深いものではない。簡略な描写。
- ・5月1日、天窗洞。登ろうとして様々の手だて。やや詳しい描写。
- ・5月3日、雁湖方面の宝鷄峯の洞（芭蕉洞か？ 明記なし）。滝があり、内に芭蕉多し、と。
- ・5月4日、道待洞は通り過ぎただけ。
- ・5月5日、靈峯奥の鐵板嶂あたりで、岩洞をいくつか。
黄巖層洞は、岩壁の中腹に口をあける岩洞か。梯子がなければ入れない。
溪流が流れる谷間、仙靈の宅と描写。
- ・5月7日、北部の石仏洞は探したが見つからなかった。
- ・随所で雁蕩山水系を記述。
- ・現在観光地としてある「雁蕩古洞」については、記事がない。

⑯遊五臺山日記 山西1633年8月4日～8日

- ・洞穴記述なし。

⑰遊恆山日記 山西1633年8月9日～11日。

- ・洞穴記述なし。

*名山遊記のまとめ

(a) 主たる洞・入洞した洞

巻1「名山遊記」諸篇において、徐霞客が「入洞」し、観察記録を残しているのは、浙江雁蕩山の「靈峯洞」「龍鼻の穴」「天窗洞」（遊雁蕩山日記前・後）、福建延平府将楽県の「玉華洞」（閩遊日記前）、龍洞（閩遊日記後）あたりである。

雁蕩山は、火成岩の岩山で、侵食作用による裂け目が、細長い縦穴を形成する。鍾乳洞のように入口があって中が空洞、というのではなく、オープンな裂け目が長く続く形をとる。裂け目が垂直ではなく、斜めに裂けている場合、裂け目に沿って登ることができる。それが「入洞」ということになる。やや詳細な記述がある三洞も、徐霞客が訪れて入洞した洞穴と数えることができるのではないか。「雁蕩山諸洞」として、まとめて「1」と数える。

福建のものとしては、唐・楊は「石灰岩溶洞、福建2」とし、褚紹唐は、「徐霞客観察岩洞、福建1（将楽玉華）」と数える。閩遊日記後に「龍洞」の記事があり、徐霞客が入洞したことは明らかであり、「福建1」とした褚紹唐の記事は正確さを欠く。しかし、「遊記」の記事から、龍洞は鍾乳洞ではないと考えられ、「溶洞2」とした唐・楊も不十分である。これらは「徐霞客入洞洞穴＝岩溶洞（鍾乳洞）」としがちな、西洋近代自然科学思想の影響から脱していないことがもともとなっているのではないかと。より正確には、徐霞客が入洞して探索した福建の洞穴は「2」であり、そのうち鍾乳洞は「1」である、とすべきであろう。

(b) その他

この他に、「入洞」せず外から観察したり、そもそも浅い「穴」状のもので、「入洞」とは呼びえないものがたくさんある。

丹霞地貌や火成岩の岩洞は、崩落や風化によって形成されたもので、概して浅い。

形状は、崩落によるドーム状の洞穴として、雁蕩山の水簾洞・維摩石室、武夷山の水簾洞などがある。

浅い岩穴をなしているものの中には、道仏の修行場であったり、祠が作られたりしているものもある。天台山華頂峯の「黄経洞」や明岩の洞穴、雁蕩山の石梁洞、廬山の仏手巖、嵩山の初祖洞などがある。

丹霞地貌の洞穴は、浅い横穴を形成しているもので、武夷山の九曲溪沿いにある。これは後述する、江右遊日記における龍虎山などに見られる。

洞と名を冠するものの、門状のものや巖に丸い穴があいているだけのものもある。前者は九鯉湖の古梅洞、福建永安の環玉洞、後者は天台山の円通洞などがある。

3-2. 浙遊日記

遊記の巻2前半は「浙遊日記」⁽¹⁶⁾。浙江における1636年9月19日～10月17日の記録である。洞穴に関する記事がある部分を、三箇所検討する。

① 靈隠寺飛來峯 杭州府錢塘県1635年10月1日

- ・飛來峯に三つの岩穴が口をあける。まとめて「1」と数える。

やや簡略な描写。

洞中に様々な塑像が配置されており、観光地化している。

元代に楊璉真加が破壊し、今は乞食坊主どもの喧噪で趣がない、と嘆く。

そのうち、ちょうど喧噪が聞こえない時間があり、洞頂に座して観察。

② 洞山 杭州府新城県同年10月4日

- ・明洞（北）と幽洞（南）の二穴がある。二穴で「1」と数える。
- ・鍾乳洞。
- ・山名は、地方志などによれば、仙洞山ともいう。
- ・洞名は、地方志などによれば、靈隠洞という。
- ・明洞は、四明山の「分窗」に似ていて、洞口の外に二次生成物がある。上から鍾乳石が垂れ、下から石筍が伸び、その隙間は20cm以下。
- ・幽洞は水洞で、リムストーンプールらしきものが生成されている。
奥には瀑布がある。
- ・洞の少し南に、溪流沿いに鍾乳石がある。宜興あたりの白鶴洞に似ている。
- ・詳細に描写し、高く評価している。

③ 金華山（北山） 金華府金華県・蘭溪県同年10月10日～11日

- ・徐霞客自身は、金華4洞、蘭溪4洞とする。全体で「1」と数える。
- ・鍾乳洞。

山腹に道教の伝説にちなむ石羊がある。これは地表の石灰岩柱（ピナクル）であろう。

- ・金華山は、南部が金華県、北部が蘭溪県に属す。それぞれの四洞は、隣接する。
- ・最後に、この間訪れた洞を評価し、ランク付けをする。

③1. 金華県エリア10月10日

- ・一般には、「朝真洞・冰壺洞・双龍洞」で「金華三洞」という。
- ・高いところの朝真洞から、冰壺洞、双龍洞の順に入洞し、詳述。
- ・朝真洞は「灯（おそらく松明）」を手に入洞。
内部は複雑に入り組み、脇室やくねくねと曲がる穴がある。
ドームでは天井から光が差し込み、真珠や宝石を見るよう。
- ・冰壺洞の入口は、嘴を開いたような縦穴。
杖を投げ下ろし、「炬（松明?）」を紐で吊して下ろし、入洞。
瀑布が落ち、「無数の珠玉」が光る。その水の行方は分からない。
比較的まっすぐな縦穴で、曲線は少ない。
- ・双龍洞は外洞と内洞からなる。
外洞はドーム状で、広々とし、天井から鍾乳石が垂れる。
半ば水没している入口から、裸になって内洞へ入洞。
内洞には鍾乳洞の奇勝が展開。
- ・三洞の西に登ると講堂洞。
ドーム状の乾洞だが、おそらく鍾乳洞。
乾燥して清潔で、「居」「憩」に向いている、と。かつて劉孝標が経を講じたという。

③2. 蘭溪県エリア

- ・洞源寺（上洞寺）の近く。
- ・洞源寺にある石碑の記事から、「六洞」とは、金華三洞と、蘭溪エリアの三洞をあわせたものだと認識を示す⁽¹⁷⁾。
- ・洞窗。白雲洞と間違えた。入口が狭く、素通り。
- ・白雲洞は、洞源寺の背後。
灯り無しで入洞し、手探りでの探索。
- ・紫雲洞は、白雲洞の西。
やはり灯火が無いので、詳しい探索はできず。
- ・水源洞は紫雲洞の東。
石柱があつたり、幻想的な二次生成物が展開。蜃気楼のようだと形容。

③3. 金華蘭溪の洞評価

- ・二日間の洞穴探索を振り返り、洞の優劣を論じる。
- ・観点は靈妙さ、珍奇性、形勝としての優。
- ・1位双龍、2位水源、3位講堂、4位紫雲、5位朝真、6位冰壺、7位白雲、8位洞窗。
- ・さらに洞山の「明洞・幽洞」を論じ、1位と2位との間にランクイン。

*浙遊日記のまとめ

徐霞客自身のまとめによれば、浙遊日記で言及・検討されている鍾乳洞の数は、金華8と洞山1で、「9」となる。これに杭州府飛來峯の「非鍾乳洞」の「1」が加えられる。

浙江省全体で見れば、これに卷1の雁蕩山の「非鍾乳洞」の「1」が加わる。徐霞客が入洞探索し記述した洞は、浙江省では「11」、うち鍾乳洞が「9」と数えられる。

徐霞客故居の展示のもとと考えられる、唐・楊は、浙江省の石灰岩溶洞を「14」とする。本稿の「9」とは「5」の隔たりがある。唐・楊が、どの洞を徐霞客が訪れた洞（それも溶洞）と数えたのかは不明。また褚は、浙江省の岩穴を「10」と数える。これは本稿の立場に近いが、褚は雁蕩山の洞を数えない⁽¹⁸⁾。

注

- (1) 明末の徐宏祖（号霞客、1587～1641）の手になる旅遊日記。本稿での引用などは、褚紹唐・呉応寿整理の「上海古籍出版社本」（1980）を底本とする。
- (2) “cave”にあたる漢語としては、主として「洞穴」と「洞窟」があり、どちらがより妥当であるかについては、議論がある。学会名や書籍名などでは「洞窟」が主流だが、日本の洞窟学の草分けである故山内浩氏は「洞穴」にこだわった。本稿では、学問名としては「洞窟学」を用いるが、“cave”そのものを表す場合は「洞穴」の語を用いる。
- (3) たとえば、徐霞客遊記に関する論文集として最初期のものに『徐霞客研究文集—紀念徐霞客誕辰四百周年』（1986年）があるが、収録論文25点のうち、4点が喀斯特地貌と洞穴に関するものである。
- (4) Ward, Julian. *Xu Xiake (1587-1641): The Art of Travel Writing*. Richmond: Curzon Press, 2001.
- (5) 本多力訳、文庫クセジュ、白水社、2003年。原刊は、1998年。
- (6) さらに、これらの一部を補正したものが、「徐霞客研究」（10号、2003）に、「世界岩溶地貌和洞穴考察研究的先駆——徐霞客」と題して、朱徳浩・李慧芳・朱学隠の連名で掲載されている。
- (7) なお、集成附録の文献索引には、同名の論文が、「地理知識」（1984-3）にあるというが、この論文との関係は不明である。
- (8) このうち、金華・桂林七星・勾漏洞は実地見学し、簡略な報告をした。玉華洞は、2016年10月に訪問予定。
- (9) 473（石灰岩溶洞）—97（未進考察のもの）=376となる。
- (10) 大陸中国では、徐霞客は一般にも広く知られ、学術界でも、地理学・自然科学的方面において高く評価されてきた。例えば、張永康他編『徐學發展史』（2012、中国地質大学出版社）では、彼が「時代先駆地理学家」「中国近代地理学開山泰斗」「世界最早的偉大岩溶学家」として評価されてきたとする。いわば、地理学・自然科学の「先駆者」であったとする。ここでいう「先駆」とは、西洋近代科学の、地理学・自然科学の成果の上に立ち、その枠組みで、徐霞客の記述を捉え、共通性や近似性を読み取って、「先駆性」を主張するものである。例えば、唐・楊は、ロシアのロマノソフの『地層論』（1763年刊行）を取り上げ、徐霞客の「遊記」著述は、それに100年先立っている、といった類である。

しかし「先駆者」とは、例えば学術や文化の大きなムーブメントがあり、それ以前にその問題に成果をあげた場合に用いられるものである。つまり、「先駆者」とは、それに続く本格的な成果がある場合の用語である。

徐霞客の場合、確かに彼の著述には、地理学的・自然科学的ともいえる、客観的な観察と考察が見られる。それらは豊かな内容を伴うものと言える。しかし、それでは徐霞客の地理学的・自然科学的成果を踏まえ、さらにそれらを発展させるムーブメントが、例えば彼の次の時代である清朝に興ったかといえ、そうは言えない。また徐霞客の著述が、西洋で読まれ、西洋を起源とする科学思想に影響を与えたかといえ、そういうことも全くないのである。

確かに、徐霞客の成果は、後の西洋科学思想と類似するものがあり、通底するものがあると言えるが、直接的に連続するものではない。その意味では、西洋近代文化を基底とする、地理学・自然科学思想の「先駆」とは言えないのである。

西洋近代文化を基底とする地理学・自然科学の成果の上に立ち、その枠組みで徐霞客を捉えようとすると、徐霞客の仕事は、突出し、孤立したものになってしまうのである。

それではどうすればよいのか。それは、「近代科学」の立場、文脈から一度離れ、伝統的中国文化の「自然観」「自然科学思想」の文脈の中に位置づけることから始める必要がある。この点、大陸中国では、「科学者徐霞客の先駆性」「傑出性」の呪縛から離れられない状況にある。むしろ欧米の研究者の方が自由である。この点は、後述する。

- (11) 前掲注4、P167など。
- (12) Needham, Joseph. *Science and civilisation in China*. Cambridge University Press, 1954-71. 邦訳『中國の科學と文明』(1974-81思索社)。
- (13) 前掲注4。
- (14) 7番目の節「鷄足山」において、ワードは、「滇遊日記 二」八月十八日条の神秘体験と徐霞客の独白を紹介している。
- (15) このことは、実は「遊記」に留まらない。嵩山に関する山岳誌において、洞穴の記事は必ずしも主たるものになってはいない。
- (16) 浙遊日記については、拙訳がある（「徐霞客遊記訳注稿 西南遊記篇（一）—『浙遊日記』（前半）」『埼玉大学紀要』（教育学部）第61巻第2号、「徐霞客遊記訳注稿 西南遊記篇（二）—『浙遊日記』（後半）」『埼玉大学紀要』（教育学部）第62巻第1号。）
- (17) 現在は、蘭溪流域にある、涌雪・紫霞・白雲・呵呵・無底・漏斗を「六洞」と数える。
- (18) 唐・楊や褚は、南直隸（江蘇）の洞を全く数えない。実は、徐霞客は、22歳の万曆35年（1607）の初めの遊行で江蘇の太湖畔の洞庭山を訪れ、33歳の同46年（1618）には江蘇宜興の張公洞と善卷洞を訪問したことが、陳函輝の「霞客徐先生墓志銘」などから明らかになっている。これらの遊行に関する「遊記」本文は残されていないが、洞庭山の洞は、浙遊日記（10月10日条）において双龍洞と比較され、張公洞は、閩遊日記前（2月20日条）において玉華洞と、江右遊日記（1月5日条）において石城洞と比較されている。つまりこれらは徐霞客が実際に入洞して探索したことが確実である。「遊記」の記事はないが、徐霞客入洞の洞としてカウントすべきかもしれない。

(2016年9月29日提出)

(2016年12月15日受理)